

昇仙峡一帯の地質と渓谷美、信仰と神社をはじめとした有形・無形の文化財23件で構成される輝きのストーリーが認定されました。
「甲州の匠の源流・御嶽昇仙峡」
 ～水晶の鼓動が導いた信仰と技、そして先進技術へ～

日本遺産 (Japan Heritage) とは、文化庁が地域の歴史的魅力や特色を通じて、文化や伝統に基づく「ストーリー」を認定する制度。ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を、地域が主体となり、国内外に情報を発信し、地域の活性化を図ることを目的としている。



令和3年度文化庁文化芸術振興費補助金
 (地域文化財総合活用推進事業)

昇仙峡地域活性化推進協議会
 〒400-8585 甲府市丸の内一丁目 18 番 1 号
 (甲府市観光課内)
 電話番号：055-237-5702



御嶽昇仙峡

～水晶の鼓動が導いた信仰と技、そして先進技術へ～
 MITAKE-SHOSENKYO
 日本遺産

ガイド用 ハンドブック



Story

日本遺産

甲州の匠の源流

御嶽昇仙峡

～水晶の鼓動が導いた信仰と技、そして先進技術へ～

紡がれる、輝きのストーリー

日本を代表する水晶の一大産地だった、昇仙峡一帯。周辺に数多く存在した鉱山では、鉱床内を照らすほどの水晶の輝きがあったという。

約1,000万年前に起きたとみられる地殻の大変動が生み出した花こう岩に含まれる水晶は、その昔には、「水精」と表記された。まさに水から生まれたようなその美しさ、清冽な水源地で採れる神秘、その姿は、信仰にも結びついていった。

昇仙峡の奥に鎮座する金櫻神社、さらに本宮にあたる金峰山(別名「甲州御嶽山」)の山頂には、花こう岩の御神体「五丈岩」が鎮座し、水晶玉や土馬など水信仰にまつわる遺物が出土した。

長い年月をかけて川の流れてによって削られた花こう岩は、日本一と称される渓谷美をつくりあげ、ここから水晶が産出されたことにより、世界に名だたる研磨技術と甲州水晶貴石細工が育ち、さらに日本一のジュエリーのまちへと発展した。

そして現代、その匠の技は、電子機器など最先端の分野でも応用され、私たちの生活を支えている。



金峰山

信仰と水晶の源流

金櫻神社と金峰山



金櫻神社

金櫻神社は、御嶽昇仙峡の渓谷を登りつめた富士山を仰ぐ霊地に鎮座する。約2,000年前に創建された金峰山山頂の本宮に対し、約1,500年前、里宮として開山。蔵王権現が祀られ、金峰山信仰の中心地として繁栄した。その後も武田氏をはじめ代々領主から厚く信仰され、ゆかりの宝物を多数所蔵する。

往時、昇仙峡を含む金峰山麓の花こう岩体は優れた水晶の一大産地であり、花こう岩の御神体「五丈岩」や御神宝「火の玉・水の玉」など、水晶と信仰の奥深いかわりが推測される。金櫻神社にある遙拝所からは、富士山と金峰山を望むことができる。

甲州の匠の原点

水晶研磨の流れは御嶽昇仙峡から甲府へ



日本式双晶(山梨大学所蔵)

金櫻神社の御神宝

※現物は一般公開されておりません。

当初、水晶は六角柱の原石のまま置物として珍重されていたが、江戸時代に、京都の玉屋弥助が神社の神官たちに水晶の磨き方を伝授し、水晶細工は御嶽の特産品となる。江戸時代の末ごろには、水晶加工の中心地が御嶽から甲府へ、荒川の流れてに沿って南下することになる。

削る、磨く、という甲州の匠の源流は、さらに古くは、縄文時代の水晶の「矢じり」にも見ることができる。主要な材料だった黒曜石に混じり水晶の「矢じり」が多く発見されているのは、水晶の産地として、いかに恵まれた土地柄であるかを物語っている。

昇仙峡を開拓

御嶽新道と長田円右衛門の物語

その昔、花こう岩の浸食が作り出した昇仙峡一帯は、谷深く閉ざされ、険しい山道に金峰山信仰の修験者が往来する仙境の地であった。江戸時代後期、地元猪狩村の農民「長田円右衛門」たちは、甲府城下への往来に苦勞していた地元民のため、溪流沿いの新たな開削に立ち上がり、通算約9年の歳月をかけ、天保14年(1843)、新道を作り上げた。

もとは生活道としての開削であったが、次第に昇仙峡に眠る類まれなる景勝が日の目を見、「御嶽新道」は観光道路としても一躍注目されるようになったのである。



竹邨三陽筆「甲斐御嶽新道・御坂図」(右幅)嘉永5年(山梨県立博物館所蔵)



昇仙峡の遊歩道にある長田円右衛門の碑



新道開削工事でできた石門

花こう岩と源流の恩恵

水晶の聖地に、日本一を誇る溪谷美

長田円右衛門たちが心血を注いで開削した「御嶽新道」が「御嶽昇仙峡」として全国にその名が広まったのは、大正11年10月の皇太子殿下(昭和天皇)の行啓がきっかけだった。昭和25年には毎日新聞社の新日本観光地百選で溪谷部門1位に入選し、「日本一の溪谷美」の冠をいただいた。そして昭和28年に国の特別名勝となった。

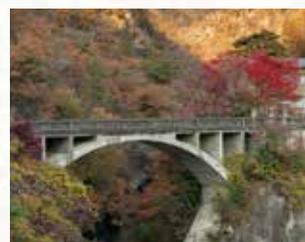
花こう岩がつくる迫力の断崖、清冽な流れに削られた奇岩の連なりは、秘境と呼ぶにふさわしい絶景。長潭橋から仙娥滝まで約5km、溪流沿いの遊歩道(御嶽新道)から、覚円峰をはじめ自然が作り出した雄大な景色を間近に楽しめる。現在、水晶の採掘は行われていないものの、水晶宝石博物館や土産店が立ち並び水晶発祥の聖地となっている。



板敷溪谷 大滝



昭和初期の「御嶽昇仙峡」絵葉書(山梨県立博物館所蔵)



長潭橋の紅葉

現代に紡がれる、匠の技

ジュエリーに、最先端機器に

昇仙峡一帯での水晶の採掘は、明治期に最盛期を迎え、明治後期に水害に対する治山治水のために採掘が制限されるまで続いた。その後は、大正期にブラジルからの輸入が始まるが、研磨加工の技術は受け継がれ、甲府を中心に国内屈指の宝飾産地が築かれた。全国唯一の公立のジュエリー専門学校「山梨県立宝石美術専門学校」では、宝飾産業を支える才能溢れる若手がジュエリーの新たな魅力の発信に挑戦している。

また、水晶研磨を礎に発展した技術は、工業用部品製作にも重要な役割を果たし、現在ではスマートフォンなどの電子機器にも使用され、ハイテクの進歩に欠かせない存在となった。



新しい感性から生み出されたジュエリー



SAW(表面弾性波)ウェーハ研磨工程
※SAW (Surface Acoustic Wave)
ウェーハ：無線通信部品に不可欠な素材



1 御嶽昇仙峡

江戸期から明治20年代頃まで「昇仙峡」という呼び名は使われておらず、「御嶽新道や巨摩溪、金溪」等の名が適宜使われていた。大正11年に当時摂政宮だった後の昭和天皇が来県し、覚円峰下の金溪館に休み「耶馬溪を遥かにしのぐ」と記者団に語ったことがきっかけとなり広く知られるようになった。

- 昭和28年(1953年)3月国の特別名勝に指定。
- 令和元年(2019年)6月「甲武信ユネスコエコパーク」に認定。
- 覚円峰は、谷底から180mの高さの1枚岩である。
- 3月中旬:黄褐色のマンサク/4月中下旬:ヤマブキ/9月中旬:イワギボウシ/11月:紅葉

MEMO



2 つばくろ いわ がん みやく 燕岩岩脈

昇仙峡地域に約100万年前に黒富士火山の火砕流が堆積。その後この火砕流堆積物を貫く火山活動が岩脈(燕岩岩脈)として地表に現れたもの。露頭では貫入面に対して垂直に発達した節理が観察でき、幾重にも節理が重なった様子は学術的に極めて貴重である。

- 昭和9年12月28日国の天然記念物に指定。
- マグマが急速に冷やされて固まった安山岩/柱のように割れる柱状節理が特徴。
- 旧荒川をせき止め、現在の昇仙峡を通るように荒川の流路変更を引き起こした。
- 節理とは、マグマが冷却する際の体積収縮によって形成される規則的な割れ目のこと。

MEMO



3 きんぶさんごじょういわ 金峰山五丈岩

金峰山五丈岩は標高2,599mの金峰山山頂にある巨大な花こう岩である。およそ2,000年前崇神天皇の御代、諸国に蔓延した疫病を鎮めるためこの地では金峰山山頂に少彦名命(すくなひこなのみこと)が祀られた。さらに700年ほど後には、吉野金峯山より蔵王権現が勧請され修験道者の行場にもなったという。

山頂からは、水の信仰に関わる土馬や水晶玉などが発見され、出土品は山梨県立博物館に展示されている。

- 花こう岩/方状節理が特徴。

MEMO



4 能面

『甲斐国志』には、「宝殿ニ蔵ムル所」として、金櫻神社の宝物が列挙されている。その中に「武田勝頼奉納ノ仮面四箇 銘ニ天下一イセキトアリ」との記述があることから、江戸時代以来武田家所縁の宝物として伝来してきたものと思われる。

能面は、①増髪、②今若、③平太、④小面、⑤中將、⑥尉、⑦喝食、⑧邯鄲(かんたん)男の8面で①と②には「イセキ」の刻銘がある。

※「イセキ」とは、能面作家の家系のうち、中世の能面作家・三光坊を祖とするとされ、越前出目家、近江井関家、大野出目家の三代家系の内の近江井関家のことを示す。

●昭和42年8月7日 県の有形文化財(工芸品)に指定。

MEMO



5 住吉蒔絵手箱・家紋散蒔絵手箱

住吉蒔絵手箱

金櫻神社宝物帳に「武田信玄公母堂奉納」とされている宝物の一つ。長方形の合口仕立てで、箱の角を内にえぐり込む入角とし、蓋の表面にわずかに甲盛をつける。箱の表面は全体に黒漆を塗り、金の平蒔絵に絵梨子地を交えて文様を表す。蓋表から4側面にかけては、住吉社を主題とした意匠をくまなく散りばめている。

●昭和42年8月7日 県の有形文化財(工芸品)に指定。

家紋散蒔絵手箱

長方形の合口造りで、蓋の表面には緩やかに甲盛がある。身の側面には紐金具を打ち、内側には懸子を1枚収める。箱の表面は全体を錫梨子地に仕立て、桐、梅鉢、引料、花菱などの家紋を散らす。

●昭和42年8月7日 県の有形文化財(工芸品)に指定。

MEMO



筏散蒔絵鼓胴

武具散蒔絵鼓胴

6 いかだ ちらし まき え こ どう ぶ ぐ ちらし まき え こ どう 筏散蒔絵鼓胴・武具散蒔絵鼓胴

筏散蒔絵鼓胴

『甲斐国志』『甲斐国社記・寺記』には武田勝頼によって奉納されたと記されている。全体的に黒漆を塗り、金の平蒔絵に絵梨子地を交えて、流水に筏の文様を表す。

●昭和42年8月7日 県の有形文化財(工芸品)に指定。

武具散蒔絵鼓胴

『甲斐国志』『甲斐国社記・寺記』には、仁科五郎(武田信玄の五男)によって奉納されたと記されている。筏散蒔絵鼓胴と同様に、全体的に黒漆を塗り、金の平蒔絵に絵梨子地を交えた高台寺蒔絵の技法を用いている。鼓胴の受けには、朱漆で「観世」(花押)、「阿古」(花押)、黒漆で「弥左衛門」(花押)と銘が記されている。

●昭和42年8月7日 県の有形文化財(工芸品)に指定。

MEMO



7 かな さくら じん じゃ だい だい かぐら つけたり めん い しょう 金櫻神社大々神楽付面と衣装

現在の演目は、「神楽次第」によると、奉幣(ほうへい)、宇須女(うずめ)、白狐、縁舞、湯立、住吉、竜・雷神、手力雄(たちからお)、翁舞、散供、五竜王、山幸、猿田彦、大山祇(おおやまつみ)、小屋根・太玉、扇舞、謡女(うたいめ)、事代主、四方、大霊女(おおひろめ)、童子、剣舞、稲田姫、少彦名、四方切、神木舞という26座記されている。

金櫻神社の春の例大祭で、太々神楽は奉納されている。

衣装は絹製であり、衣装一式は、金櫻神社において収蔵・管理され、使用していない一部の衣装は拝殿に展示されている。

●昭和57年3月9日 市の無形民俗文化財に指定。

MEMO



8 きゅう かな ざくら じん じゃ いし とり い 旧金櫻神社石鳥居

亀沢川の鳥居坂橋の東方に所在していた石鳥居は、鎌倉時代に制作されたものと推定。昭和59年(1984年)に甲斐市吉沢地内の田んぼの中に倒伏していたものを発掘し、現在は、敷島総合公園に移築復元されている。

この鳥居は、金櫻神社の一の鳥居と伝えられており、この方面の御嶽道の出発点であったともいえる。

●昭和61年9月17日 県の有形文化財(建造物)に指定。

MEMO

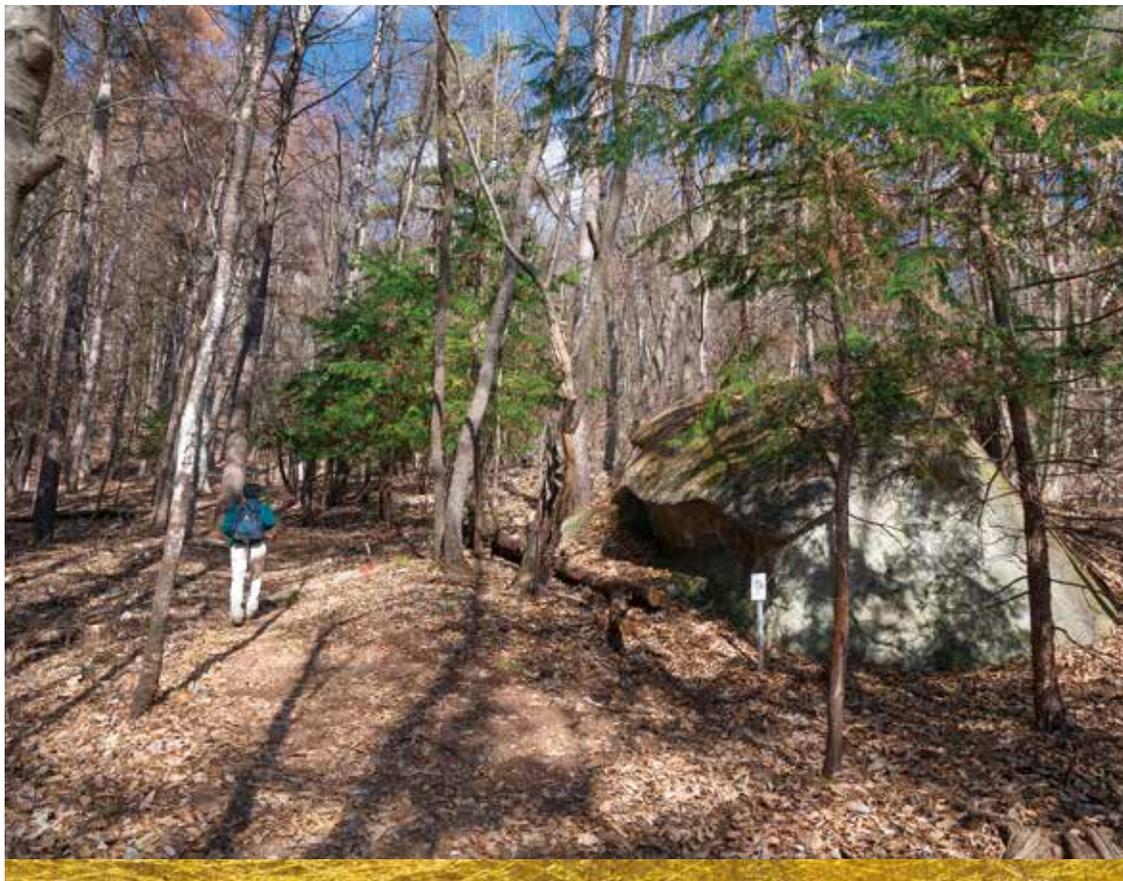


9 み たけ こ どう かめ ざわ きつ さわ つか はら すじ せき ぞう ぶつ ぐん 御嶽古道(亀沢、吉沢、塚原の3筋)の石造物群

甲府市北部の片山周辺では良質な石材産地であり、多種・多様な石造物が造られている。これらの石造物は信仰の証として、また、様々な記念碑として造立したものであって、当時の人々の生活や信仰を知ることができる貴重な文化遺産である。

石造物は、常夜灯、馬頭観音、庚申塔、石祠、万霊塔、巡拝塔、道祖神等々様々で、その多くは中世以降に造られている。

MEMO

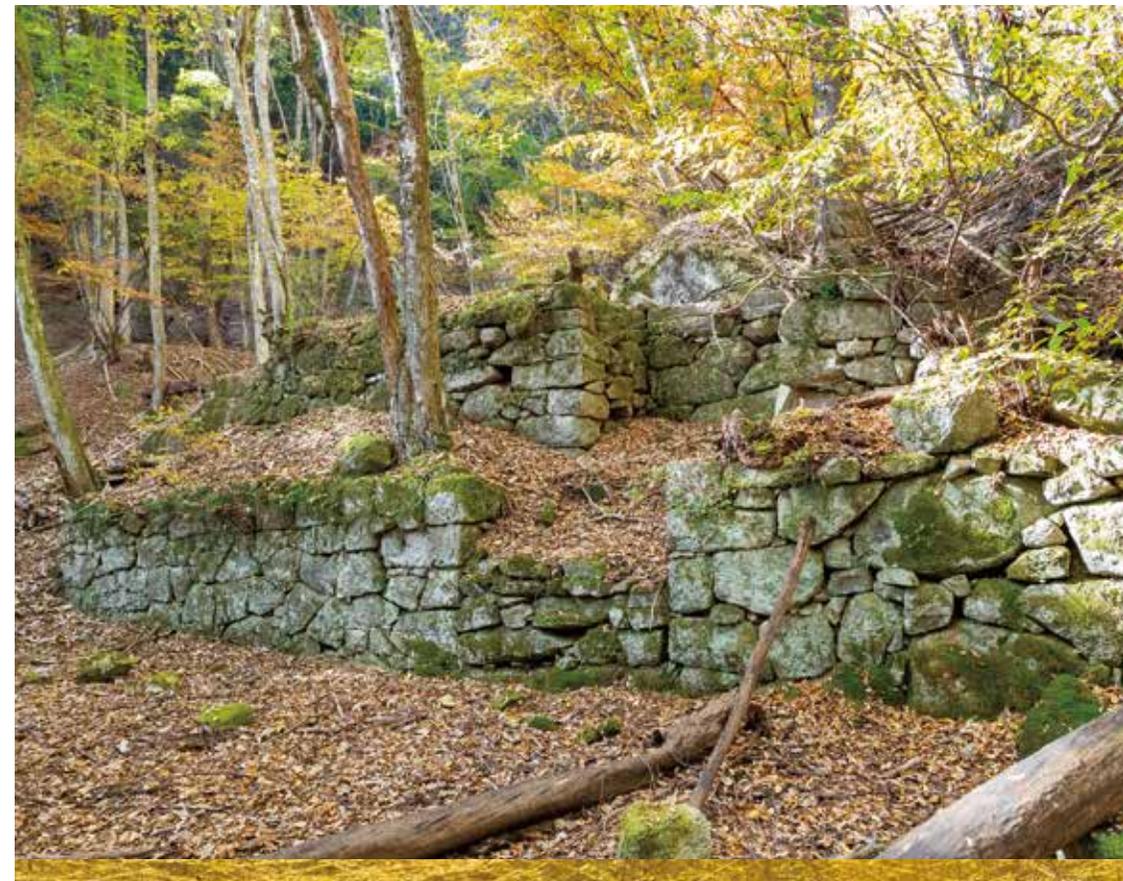


10 御嶽古道

御嶽古道は「御嶽道」とも呼ばれ、秩父多摩甲斐国立公園のほぼ中心に位置し、山梨県と長野県の県境にそびえる金峰山を霊山として、これに参詣するために開かれたルートである。

『甲斐国志』によると、御嶽道は「山口九箇所アリ、南ハ北山筋ノ吉沢・亀沢(甲斐市)・塚原(甲府市)、東ハ万力筋ノ上万力(山梨市)・西保・柚口(甲州市)、西ハ逸見筋ノ穂坂(韮崎市)・江草・小尾(北杜市)ナリ」とあり、九つのルートがあり、それぞれに里宮が設けられ賑わったことが記されている。

MEMO



11 旧羅漢寺の遺構

旧羅漢寺は、大永年間(1521-1527年)に創建されたとされ、北山筋の高野山とまで呼ばれた修験道が盛んな寺であった。寺記にある慶安4年(1651)の「羅漢寺火災」によって焼失したものと考えられるが、建物は、谷底を削り出し石垣によって区画され、雛壇のように細長く作られたテラス状の最上段に本堂、その下の段のテラスに庫裏が建てられており、現在もこの遺構が残されている。

MEMO



12 もく ぞう ご ひやく ら かん ぞう 木造五百羅漢像

修験道場として開山された羅漢寺に伝わる羅漢像。檜材などを用いた一木造りの立像で、合計154軀ある。当時は美しい彩色が施されていたと思われる。

数多い羅漢の形態は簡略化されているが、表情はそれぞれ違っている。像底に応永31年(1424年)の墨書があり、年代も明らかで個性豊かな群像である。

●昭和59年11月8日 県の有形文化財(彫刻)に指定。

MEMO

13 もく ぞう あ み だ に よ ら い ざ ぞう 木造阿弥陀如来坐像

本像は、修験道場として開山された羅漢寺に伝わる阿弥陀如来。檜材などを用いた寄木造りで、高さ70cm。台座上に右足を前に、左右の足の甲を反対の足のものの上に交差し、足の裏が上を向くように組み、坐しており(結跏趺坐(けっかふざ))、衣は、右肩を出して左肩を袈裟で覆う着方(偏袒右肩(へんだんうけん))をしている如来像である。応永30年(1423年)の銘があり、室町時代の貴重な彫刻である。

●昭和59年11月8日 県の有形文化財(彫刻)に指定。

MEMO



14 み たけ どう そ じん 御嶽道祖神

①御岳の道祖神は、重厚感のある木造の社の中に御幣(みてぐら)が祀られている。この御幣が道祖神の御神体として特に意識され、毎年道祖神祭りに新しいものにかえられる。

②猪狩③草鹿沢④仲谷の道祖神は、複数の丸石である。また、猪狩の道祖神には菅原道真を祀っており、高さ二十八cmほどの石造物がそれである。

⑤高町の道祖神は、石祠と二つの丸石であり、屋根と胴体が分かれる造りになっている。もともとは集落の北に位置する近戸神社境内に祀られていた。

⑥桐久保の道祖神は「猿田彦命」と刻印された丸石である。

MEMO



15 かな さくら じん じゃ せつ しゃ はく さん しゃ 金櫻神社撰社・白山社

金峰山の里宮として建立された金櫻神社の現存する数少ない撰社の一つ。御岳には上組・中組・下組・桐久保のそれぞれに山の神があり、白山社は中組の山の神である。

●歯痛の神で、楊枝を供え、歯痛が治るとお礼の楊枝を供える。

●祭りは5月15日。白山神社の前に石でできた「くど」(かまど)があり、米や材料を背負って持ち込んだ。

●男たちが料理を山に運び、お供えした料理は、祭りが終わった後、宿に持ちかえり食べる。

上組の高根社は、家庭円満・商売繁盛・夫婦和合の神様。下組の我貴山社は金櫻神社の末社であり、金峰山の遥拝所。桐久保の天狗社は、焼け神様(火の神様)と呼ばれている。

MEMO



16 おさ だ えん えもん けん しょう ひ 長田円右衛門顕彰碑

昇仙峡という呼称以前、御嶽が広く世に知られるきっかけとなった新道を開拓した長田円右衛門。村人を助け、文人画家を招き、遊覧客を接待した。甲府勤番士にも支えられ、甲府代官所とも連携した。その功績は顕彰碑に刻まれ、昇仙峡の中心の地で今の世も多くの人々に讃えられている。

- 昔の御岳に住む人々は、深い谷や険しい山道を歩き、甲府城下へ薪や炭を売りに行き、米や塩を買っていた。
- 長田円右衛門は、猪狩村(現・猪狩町)出身。私財を投じて天保14年(1843年)から36年もの歳月をかけて新道を開通させる。
- 開削の結果、素晴らしい景勝を楽しめる観光道路に発展。

MEMO



17 かな さくら じん じゃ ご しん ぼう 金櫻神社の御神宝

金櫻神社の伝承によれば、これらを「火の玉」(3個)「水の玉」(2個)と呼び、神祇管領の許可を受けるために、上洛したかつての金櫻神社の神職たちが、上洛の際、水晶の原石を持参して、京都の玉造に加工させた現存する日本で最古の加工された水晶である。

- 純度の高い水晶は、金峰山周辺の鉾山から産出されたものである。

MEMO



18 えん たく じ じ ぞう どう 塩澤寺地藏堂

寺伝によれば、大同3年(808年) 弘法大師が諸国教化の折にこの地で錫杖を休め、地藏菩薩の降臨を祈願して感得し、自ら六寸あまりの石の地藏を彫って、安置したことに始まるとされている。その後、天歴9年(955年)、空也上人が開基となり、弘法大師の像を模して造った厄除地藏像を安置して、塩澤寺と称したといわれている。

- 昭和24年2月18日国の重要文化財に指定。
- 「厄除地藏さん」として民衆の信仰を集め、毎年2月13日正午から14日正午に開かれる「厄除け地藏尊祭り」には、県内外から大勢の人々で賑わう。

MEMO



19 ゆ たに じん じゃ 湯谷神社

大同3年(808年)、弘法大師によって開湯されたのが湯村の前身である志摩の湯。志摩の世より信仰され、秋葉権現、大宮さん、湯村温泉郷の守り神である湯谷大権現を合わせて祭神とする。湯谷権現は、慶長6年(1601年)の検地帳(広瀬家古文書)にも書かれており、当時を今に伝える歴史遺産である。

MEMO



20-1 平瀬浄水場旧濾過池整水井

- 大正/1913年 ●鉄筋コンクリート造
- 建築面積11㎡ ●登録有形文化財(建造物)
- 登録年月日:1997年7月15日

平瀬浄水場の創設とほぼ同時に建設された調整井上屋。内部に制水弁を持ち、濾過速度及び流量を調節する。円形平面で、入口にはペディメントを持つフレームを配し、上部には「尽不流々混」の題字を記す。甲府市の生活近代化のシンボルとして親しまれている。



20-2 平瀬水源旧事務所(水交庵)

- 昭和前/1935年 ●木造平屋建 瓦葺
- 建築面積242㎡ ●登録有形文化財(建造物)
- 登録年月日:1997年12月12日

もと平瀬浄水場の事務所で、現在は甲府市の水道の歴史を展示する資料館として活用されている。木造平屋建、瓦葺で、正面中央にある2連のアーチで構成した玄関ポーチの意匠に特徴がある。市民生活の近代化を象徴する施設として親しまれている。



20-3 平瀬浄水場旧取水口門部

- 大正/1913年 ●石造水路坑口
- 幅14.4m 高さ11.0m ●登録有形文化財(建造物)
- 登録年月日:1998年9月2日

荒川からの取水路の浄水場側の出口に位置する。石造でポータルを造り、開口部の上に「沢渠為雨」の銘板を置く。現在ではこの取水ルートは使用されていないが、水道近代化のシンボルとして、また浄水場の石造建造物の好例として位置づけることができる。



20-4 平瀬浄水場旧片山隧道下口

- 大正/1913年 ●石造水路坑口
- 幅4.7m 高さ3.4m ●登録有形文化財(建造物)
- 登録年月日:1998年9月2日

大正2年に竣工した浄水場の送水施設。幅6m、高さ5mの石造の躯体部に鉄扉付きのアーチ状開口部を持つ簡素な建物で、内部は岩盤を穿った送水坑口に鉄管が付設される。開口上部に「片山隧道」の銘板を掲げる。浄水場の構成を知る上でも貴重な存在である。



20-5 平瀬浄水場旧片山隧道上口

- 大正/1913年 ●石造水路坑口
- 幅4.6m 高さ3.4m ●登録有形文化財(建造物)
- 登録年月日:1998年10月9日

平瀬浄水場からの送水路の一部になる片山隧道の上手口に設けられた石造の坑口で、開口部に鉄扉が付く。同市羽黒町梨の木に所在する隧道の下口と同形式になるが、上口の方が一回り小さい。甲府市の水道の歴史を知る上で、欠かせない施設のひとつである。

20-6 平瀬浄水場第2隧道上口

- 大正/1913年 ●石造水路坑口
- 幅14.4m 高さ11.0m ●登録有形文化財(建造物)
- 登録年月日:1999年8月23日

甲府市創設水道の遺構のひとつ。取水口から平瀬浄水場に至る経路の浄水場側に位置する導水隧道の上流側入口門部で、出口側の「取水口門部」に対応する。花崗石を用いて江戸切り仕上げ風に見せた丁寧な造りの門部で、「拳鍾為雲」の扁額を掲げる。



MEMO



21 黒平の能三番

黒平の能三番は甲府市の最北端、黒平町に古くから伝わる伝統芸能で、その歴史は古く、鎌倉末期から室町初期まで遡り、信州佐久郡川上村から伝わったといわれている。

一方、黒平にある地域史料「能三番由来記」によると、文治元年(1185年)1月、藤原房秀の一行が都落ちして、小字原という地に大山祇命を祀り、毎年正月14日に、大山祇神社の「道祖神祭り」の際に、神前に奉納演舞したものが、子孫代々受け継がれて今日に伝承したと記されている。神霊を慰めると共に、郷内の五穀豊穰、天災、悪疫並びに邪気を祓い、各戸の安全を護るものとして房秀が伝え残したものであるという。

- 道祖神祭りには、上黒平・下黒平地区の青年が道祖神前で神楽を奉納。
- 金櫻神社の春の祭礼では、上黒平・下黒平それぞれの能三番が踊られている。
- 昭和35年11月7日 県の無形民俗文化財に指定

MEMO



22 すみ やき かま あと 炭焼窯跡

昭和の30年代まで、御嶽昇仙峡の主産業だった林業。その中でも、収入源として大きかったものが製炭業であった。

炭焼窯は、集材の便がよい傾斜地に設けることが多く、石を積んでトタンなどで屋根を覆った簡単なもので非常に持ちが悪く、また、コナラやクヌギ、ブナ、モミジ等の雑木を炭材に使用したため、材料がなくなるとまた別の場所に炭焼窯を造り、生産していたため、炭焼窯跡は多くの場所で見ることができる。

MEMO



23 しら こし 白輿

「甲斐国志」によれば、承久の乱後、佐渡に流罪となった順徳上皇が勅使をたてて金櫻神社に供物等をささげるために、遣わした際に使われた輿と伝えられている。

- 現在は、甲斐市吉沢の常設寺に所蔵されている。
- 国の重要文化財に指定されている。

MEMO



MEMO